

焼跡

實に魔の手、鬼女の舌、空を焼かんず焰は、宵からの北風に煽られ煽られて、家を攀ぢ、地に這ひ、逞しき勢に火の手を延せば、破竹の響頻りなるに續いて起る一大爆發の音。見る間に一棟は落ちてしまった。

屋並揃ふた中頃の家の、裏手から揚つた怪しの煙を見出してから未だ半時間とは立たないのである。

西側ずらりと舐め盡して猶、足れりとせぬ烈火は、向ふ側に一際高き老舗の屋根に飛火して、其店に、庫に、堆き幾千種の薬が焼ける怪しの臭氣。

亂打の半鐘もの凄く、彼方此方の叫喚！ 悲鳴！

風は益々猛り狂へば、焰は彌々勢を得て、此所を必死のい組が目覺しき消防も、今は、鍋から溢るゝ水の爐の火に落つるのに價せぬ。

「ポンプ！ ポンプ！ 酒に火が付いたッ」

氣魂しき叫びは何處からともなく起つた。酒屋を襲ふた火は、早くも幾桶の酒を焰と化して、其焰を八方に、一面眞紅の大手を擴げさせたのである。

此火を裏手より浴びた一續の長屋は、見る見る火塊に包まれてしまった。

「おっ母さん！」

突然血ばしりたる一聲は濛々たる天地を劈くよと見る間に、道に横れる焼板を飛び越え、火花の間をくぐって、渦巻く黒煙の間に躍り込むだ者がある。

「おっ母さん！」

狂し氣の又一聲。

屋根を舐めたる火は今、軒に迫つた。

「おっ母さん！」

バラバラと頽れ落ちた屋根の響に、幽かに細き又一聲。



全焼三十九戸、半焼十五戸の調査を終へたる頃は、織るが如き大路の提灯、一つ消え、二つ減じ、やうやうに見舞の人足稀に、斗樽を下げて走る小僧、焚飯擔つて急ぐ若者の、ねぢり鉢巻ほの白く、早鐘の未だ耳底に残る午前二時！

昨夜の猛風は何處に潜んだろう？　あまりに著しい寂寞ではあるまいか。

黒裸にされた立木の處々。彼方に燻る黒き煙、此方に崩るゝ焼瓦、見渡す限り一面の焼野は、道か、屋敷か、狼藉たる木材の黒々と。

佩劍の音がチャーン々々黒影頻りに動くは物調ぶる警官である。一人は手帖に何やら認むれば、三人は高く馬乗提灯を差上げて居る。其つかれた如な灯影に現し出された此場の光景を見よ。戸板の上に横れる黒きものは何！

猛火のうちに煙を飲んで、母を呼び、母を尋ねて狂氣の如く、つひに其狂氣の境より覺むるを得ぬ宮川眞一の母と云ふことは、つひ今し方分つたところである。

衣は焼かれ、肉は爛れて、目も當てられぬ母の死骸を、彼は何と見るであらうか、と警官は皆一様に眞一の顔を見成つた。

「何だこれあ、犬か？」「ハ……………」

一聲高く笑つて、さて昨夜の負傷に、血の滴る右腕を訝し氣に眺めて居る。四人が四人、皆息を飲んだ。

「火事だ！」「何處だっ」

血走りたる眸に邊見廻して、やがて矢庭に駆けだした。

「おっ母さん！」「おっ母さん！　おっ母さん！」

熱灰の間を、續け様に呼はりつゝ駆け廻つて居る。

あゝ、應との答はいつ彼の耳に響くであらう？

今こそ此麼職工でこそあれ、私だつて男一匹、今に必ず宮川の家を再興して見せる、と常に半身不随の母を慰めて居た眞一は、かくも此まゝ、憐れな者よとのみで終つてしまふであらうか。

星の數々、雲に入つて、白みかゝつた空に、光弱き夜明の明星一つ、寂しき、寂しき曉は來た。

入力者注… 以下の修正をおこないました。 訝し氣 ↓ 訝し氣

底本… 「水野仙子全集」 第一卷

初出… 「女子文壇」 明治四十年二月

テキスト入力… 小林 徹

公開… 平成二十九年八月十八日

リンク… [水野仙子ホームページ](#)